

～将来への提言～

実行委員長 松澤 俊行

はじめに

インカレの運営は難しい。少なくとも第20回大会の運営は難しかった。

第20回大会の場合、困難の主要因として以下のようなものが挙げられる。

- 一、開催地がインカレ初進出の場所であった。
- 一、トレインは非常に寒冷な気候にさらされる区域に位置していた。
- 一、実行委員にインカレ運営未経験者が多かった。
- 一、実行委員の居住地が広範囲に渡っていた。
- 一、日本学連加盟員が減少傾向にあり、インカレ参加者も減っている。伴って収入も減少している。

上の内、幾つかについては第21回（山口）にも確実に当てはまる。最後の同題はそれ以降にもついて回る話であろう。

状況は日々変化していくし、全ての同題に回答するとは不可能である。果たしてこの場で示すことが今後汲み取られていくのか甚だ心許ないが、それなりに提言めいたものを記したいと思う。

1 開催地について

参加者から「天気は良くてもこんなに寒いとは、トレイン選定のミスだ」「こんなに長くバスに乗せていいなら、もっといろんな場所でインカレが出来そうだ」との声が寄せられた。直接聞かれたものには必ずしも悪意がこもっているわけではなかったが、「声なき声」の内には不満も渦巻いているはずである。

実行委員会側も、正直なところ準備を進める内に不安が募っていった。天候による土壇場での規模の縮小（つまり、コース短縮やクラス数現象）も現実的に考えられていた。輸送もトレインと選手村間の遠隔さゆえ、担当者は常にトラブル回避に頭を痛めていた。

が、一応ギリギリのところでは成り立った。（天候については「偶然性」に助けられたと言えるが…）ということは、「確かにいろんな場所でインカレは出来る！」のである。むしろ可能性の広さととらえ、喜ぶべきことであろう。

実際、開催地の決定権は一実行委員会の裁量を超えたところにあるので、その過程については多言を控える。

「可能性はある」と言ったが、やはり雪や凍結を考慮した場合「北」でインカレを開くのは無理があるのではないか？例えば将来もう1回、今回のトレインでインカレを開けるだろうか…。

2 開催日程について

過去インカレのクラシックとリレーは全て 3 月上中旬に開催されているが、テレインが寒冷地と分かっている場合、その時期に合わせないほうが良いこともあるであろう。

規則上も別日程での開催は可能である。

ただ、学生の立場からしても長期の休暇中である者が多いその季節は最良と認識されるのであろう、「3 月上中旬」という同意が実質強制力として働いているため、それ以外の日程は提案しにくい。そこで、その日程で行ないやすい区域を当たるということとなる。

しかし、3 月が果たして時期的に最良かと冷静に考え直してみた場合疑同な点もある。事細かには記さないが、3 月は「年度末」なのである。

安易に考えるべき事柄ではないが、後世には現実的に別日程を考慮する必要が生まれるかもしれない。例えば「ショートを春に、一遍に」というような議論が細々となされ続けているが、この辺りも関連してくる話であろう。

3 開催規模について

かつては「学生及び一般併設クラス開催不要論」が真剣に考えられたこともあったが、「観る」ことの重要性や、学連加盟員の減少の危険性が説かれる現在その議論は置きたいと思う。今、併設は絶対に必要である。

学生併設クラスの競技性はもっと充実を図るべきであろう。コースは現行のようなパラレルコースを何本も、という分け方ではなく、長さや難易度によるヴァリエーションを提供するなどしたいところである。

むしろクラシック選手権の男子 90 名女子 60 名が適切規模か、ということのを再考したほうが良いであろう。勝負性の追求や運営の負担軽減、という観点から考えればどうしても減少に傾く。

ちなみに第 20 回ではクラシック出走者男子 777 名中 11.6%が、女子 333 名中 18.0%がエリート選手である。「頑張れば手が届く」という手頃な目標になっていることが分かり、一概に多いとは言いきれない。

4 サービスについて

インカレでは他の大会にないサービスが行なわれる。そのために特有の興奮や素晴らしい感動を生み出している。

ただ、そのための準備に際して、金銭的にも労力的にも相当厳しくなっているのも紛れもない事実である。参加者に今以上の経済的負担を強いるわけにもいかず、なおかつ実行委員の中に廃人も生まないように、となるとどこかを縮小したり削除したりするのも止むなし、かもしれない。

宿泊？輸送？式典？演出？情報提供？はたまた競技？どこを犠牲にするかは出来るかは状況によって変わってくる。いずれにしても、そこがインカレ自体の先細りを防ぐために必要な部分か、逆に（悪い言い方になるが）手を抜ける部分か、その見極めは慎重に行なう

必要がある。

申し添えると、第 20 回に関してはどの部分もあれ以上は小さく出来なかった、と思う。付け加えると、今回は「インカレ自体の事前演出」に努めたことが、特記事項として挙げられる。ロゴの募集や開会式司会者の一般公募・インカレ新聞の配布などである。参加者の感想を聞くと、どうやら効果はあったようである。その効果が本当に現れるのはもしかしたら 1 年以上後かもしれないが…。

5 組織について

既述のように、第 20 回大会では実行委員会初経験の者が多く、居住地も広範に広がっていた。そのため、意思の疎通が容易ではなかった。

電子メールという強力なツールの普及により（実行委員会内アドレス所持率 90%強！）カバー出来た面もあるが、それに甘えて上辺のやりとりで満足していたことも否めない。

運営の効率化のためにも、実行委員会をうまく組織することが必要となる。

実行委員登録時に基準を設けるのも一つの手である、まず大枠として、全体人数を決定する。その内経験者を経験レベル（回数や役割）別に何割ぐらい迎えるか決め、他は「新人」で補う。新人を招き入れる際には、居住地や持ち物・特性を考慮に入れる、など。

今回の組織が何も考えず結成されたわけではない。また、上のようなクールな方法を突き詰めていくと却って「OL 界らしくない」方向に流れる必要もあるが、とにかくこの件に関して考える時は「効率化の思想」を上位に位置させるべきだと感じられる。

6 収入について

何をするにも先立つものが必要である。

が、学連加盟費やインカレ参加費という形で学生にこれ以上の負担を強いるのも心苦しい。そこで、今回は広告収入の増加を考えた。

同期会や現役学生の学際クラブの流行などにより、予想通り？声を掛けただけで得られた収入が多かった。これらは広告というよりも応援文であるためプログラムに賑わいを与えることにもなり、助かったし、非常に感謝している。OL 関係の非営利団体に対しては、引き続き協力をお願いしたい。

この収入はまだまだ伸ばせると実感される。広告の募集や処理は、実行委員以外の手を借りても行なえる部分であるし、インカレの PR という意味からも、もっと組織的に営利団体に働き掛けることを考えても良い。

繰り返す。何をするにも先立つものが必要である。

終わりに

それにしても、とりとめもなく書いたものである。

ここまで読んでくれた方はきっとインカレ運営に興味のある方に違いない。オマケとして

「これからのインカレを支える実行委員として持っていた方が良いもの」を列挙させていただく。

パソコン。Eメールアドレス。ワープロ。携帯電話。ファクシミリ。車。無線免許。大型の収納スペース。過去のインカレの資料。防寒防雪装備。そして、OLに対する情熱。最後のを持っていれば、何とかなるであろう。